

あつたつてや

あるところに、働きの若者がいました。毎日山へ行つて、一生懸命働いていました。ある晩、美しい娘がたずねて来て、

「ごめんください。わたしを、あなたの女房にしてください」といいました。若者は、「おれはひとり暮らしだから、どうぞ女房になってください」といいました。

かわいい女房が来たので、若者は元気になって、ますます一生懸命働きました。それで、だんだんお金持ちになっていきました。

女房は料理がうまくて、おじやお汁じゆも、それはそれはおいしくこしらえました。若者は、

「こんなにうまいものを毎日毎日食わしてくれるなんて、いったい、どうやって作るんだろう」と思っていました。

そのうち、女房は、だんだんやせてきました。しょんぼりと元気がないので、若者は、「おまえ、どつか体の具合が悪いのか」とききました。けれども、女房は、

「いいや。体なんか悪くない」というばかりです。

ある日、若者は、山から少しばかり早く帰つて来ました。うちの中をのぞくと、女房がおじやをこしらえているところでした。若者は、どうやって作るんだろうと思つて見ていました。

女房は、野菜をコン、コン、コンと切つて、なべに入れました。煮にえて来ると、なべのふたを取つて、着物のおしりをヨイとまくつて、小便しょうべんのようなものをびゅーつと入れました。それから、ふたをして、またコロ、コロ、コロ、コロ煮ました。

晩ご飯のとき、若者は、女房にいいました。

「おまえは、いつも、うまいものを食わしてくれた。きょうは、どうやってこんなにうまいものがこしらえられるのかと思つて見ていたんだ。そうしたら、おまえ、なんだかしりをまくつて小便をしていたじゃないか。おれ、そんな物は食べられない。きょう限り出て行ってくれ」

女房は、

「はあ、申しわけなかった。今まで隠していたけれど、わたしは大池のこいです。あな

たがあんまり働き者だから、あなたの女房になろうと思ってやって来ました。あれは、小便でもなんでもありません。こいのあぶらです。いつもあぶらをしばってあなたに食べさせていたので、こんなにやせてしまいました」といいました。そして、

「こいだとわかってしまったから、もうここにはいられません」といって、しょんぼり出て行きました。そして、もとのこいになって、大池にばちやんと入って行ったということですよ。

いっちぢぢ、さっかい

村上郁再話

資料『吹谷昔話集』野村純一編